



野呂 新館長  
インタビュー



図書館を学生や教員が  
集まって交流できる  
知のサロンにしていき  
たいですね

平成24年4月から附属図書館長に野呂忠秀水産学部教授が就任されました。海洋生物の研究者として、世界の海をフィールドとし、海外経験も豊富な野呂館長が語る「図書館像」とは？

鹿児島大学の図書館をどのようにしたいとお考えですか？

館長に就任されて半年たって、  
今のご心境はいかがでしょう

4年間水産学部長をしていまして、3月末の附属練習船「かごしま丸」竣工式が最後の公務でした。その翌日にはパリ経由でセネガルのダカールに出張し、一週間、海藻調査をするつもりで、半年前からカレンダーに丸印をつけていたのです。

ところが、その直前に図書館長兼任のお話をいただきました。これはまったくの想定外で、内心驚きでしたが、身に余る光栄とありがたくお受けしました。この海外出張のために館長就任が一週間延びてしまい、関係者の方々にはいろいろご迷惑をおかけして申し訳ないと思っています。

今後の方向性としては、すでに井上前館長がまとめられた構想がありますから、これに沿って進めていくということになると思います。スタッフのみなさんがいままで積み上げてきたものがありますから、それを見極めつつ次へどうつなげてゆくかという段階でしょうか。

私なりに考えていることは、ここにはあまり知られていないが素晴らしい資料があるので、紹介していきたいということです。例をあげると、「Challenger report (進化論で有名なダーウィンが参加したチャレンジャー号の調査報告)」、「Siboga expeditie (19世紀にインドネシア海域でオランダの調査船シボガ号によって行われた学術探検航海の報告書)」です。私のように海を研究している者にとってはとても貴重なもので、最近、東南アジアからのお客さんがいらっしまったので、見せて自慢しました。

それから、学内には大学の広報、セミナー報告、学部の情報誌などの出版物・資料が実は多くあるんです。そういった資料を収集する義務が、図書館にはあると思うんです。また、知の交流拠点として、学生・教員だれでも参加できる学内セミナーとか、昼休みの館内でDVDや映画などが見られたら、と考えています。

\*「Challenger report」と「Siboga expeditie」は、中央図書館4階大型コレクションコーナーに所蔵しています。

## どんな学生時代を過ごされたのでしょうか？

私は鹿児島大学水産学部の出身ですが、その頃は学生運動が盛んで、学内が封鎖され休講も多かったので、図書館によく来ていました。今思えば、それが鹿大生活の始まりだったな、と。専門のものだけでなく、小説などあれこれ読みました。理学部、農学部 of 図書室にも紛れこみました。理学部の先生から「うちの学生じゃないね？」と声をかけられ、それがきっかけで親しくなれたのもいい思い出です。こうした他学部との接点があることは、総合大学の良い点だと思います。

大学院は北海道大学に進んだのですが、その研究室は下級生を含め、みんな英語が堪能でショックを受けました。そこで一念発起して、図書館の語学用機器でこっそり勉強をはじめました。毎日3ヶ月昼休みに1時間聴いていたのですが、しまいには夢の中で英語が出てくるようになりました。今、 magari なりにも海外の研究者と交流できるのもこの時のおかげです。

## 学生へ伝えたいメッセージは？



私が学生だった頃と比べるとインターネットが飛躍的に進歩して、情報を手にいれるのも随分と便利になりました。それでも学生には、図書館で本や雑誌といった紙媒体に触れることの良さを理解してほしいですね。自分の専門外の分野、それまで興味がなかった分野にふれるきっかけになりますから。図書館には多くの情報があります。ただ、情報は与えられるだけではなく、まず自分で考えた後に、初めて情報を利用するのが望ましい形だと思います。

学生には読書好きになってほしいですね。特に新書は良いです。新書はいろいろな学問を広くカバーしていて、その1冊は大学の単位に相当する価値があるのではないかと思います。

実は、こういったものが数百円ぐらいで手に入るのが日本のすごいところで、外国からのお客様を書店に連れていくと感心されます。教養的なたしなみとして新書を読んでおくのは、ちょっとした社交的会話には役に立ちます。個人的な体験をお話すると、海外に出ると日本文化について質問されることが多いのですが、新書からひとつおりの知識を得ているおかげで、門外漢の私でも簡単な説明ぐらいはできるのです。

実は、こういったものが数百円ぐらいで手に入るのが日本のすごいところで、外国からのお客様を書店に連れていくと感心されます。教養的なたしなみとして新書を読んでおくのは、ちょっとした社交的会話には役に立ちます。個人的な体験をお話すると、海外に出ると日本文化について質問されることが多いのですが、新書からひとつおりの知識を得ているおかげで、門外漢の私でも簡単な説明ぐらいはできるのです。

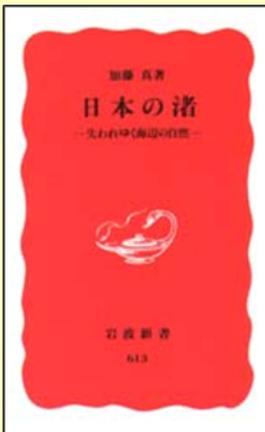
リニューアルした「なんぶう」は、海が大好きな野呂先生のインタビューを特集しました



アウトドアな館長だブー



## 野呂館長おすすめ本 \*インタビューで話題になった本、4冊を紹介します



日本の渚 失われゆく海辺の自然  
加藤真 岩波新書 1999

どの入江にも流れこむ川があり、人の住む村があり、それぞれの渚の暮らしがあった。日本は海に抱かれた国だが、神さびた森を鎮守の森として崇めてきた森の国でもあった・・・(本文より抜粋)。海辺の生態系保護を訴えた名著で、大学の授業の指定図書にもなっています。

中央図書館4階新書コーナーと水産学部図書館に所蔵あり。

- ・坂井邦嘉(2006)「科学者という仕事＝独創性はどのように生まれるか」、中公新書、(研究するとはどういうことか、大学院生必携) 中央図書館4階に所蔵あり
- ・加治将一(2011)「アルトリ岬」PHP文芸文庫、(心を病む都会の中学生が自然の中でセラピーを受け、生き方を学ぶ)
- ・水上勉(2004)「故郷」集英社文庫(海外生活を経て帰郷した故郷は原発の村になっていた)